effect sizeは，0.47，認知行動療法のそれは0.35であった。

B. 薬物療法

CD の薬物療法としては、治療ガイドラインによれば、ADHD が併存すればメチルフェニデートが第一選択で、次の選択としてリスペリドンを追加することがあげられている。ADHD が併存しない場合は、心理社会的治療で改善がない場合はリスペリドンが薬物療法の第一選択にあがる。

CD に限らなければ子どもの攻撃性に対する効果については、中枢刺激薬や抗精神病薬以外にもリチウムやカルバマゼピンなどの気分安定薬に関する研究がある。

Pappadopulos らによる meta-analysis によると、攻撃性のある児童青年期に薬物療法を行った場合、それぞれの治療薬における effect size は以下の通りである。

中枢刺激薬 0.78
非定型抗精神病薬 0.90
定型抗精神病薬 0.70
気分安定薬 0.40
抗うつ薬 0.30

CD に対する報告では、リチウムと非定型抗精神病薬の有効性を示す報告が多い。また、Pappadopulos らの meta-analysis で用いられた中枢刺激薬についての研究のほとんどは ADHD で攻撃性がみられた症例を対象としているが、ADHD の併存症がない CD に対しても MPH が有効であるとする報告もある。

非定型抗精神病薬については、リスペリドンがもっともよく研究されていて、多くの文献で CD や他の破壊性行動障害に対する有効性が示されている。また、ADHD が併存する破壊性行動障害において、中枢神経刺激薬の使用の有無に関わらずリスペリドンが有効性であることが示されている。数は少ないが、オランザピン，クエチアピンについても有効性を示唆する報告がある。

・Pappadopulos らによるmeta-analysis によると、攻撃性のある児童青年に薬物療法を行った場合、それぞれの治療薬における平均effect sizeは，中枢刺激薬 0.7，非定型抗精神病薬 0.90，定型抗精神病薬 0.70，気分安定薬 0.40，抗うつ薬 0.30であった。

2. アンケート調査

アンケートについては作成し，現在回答を分担研究者の勤務する病院，子どものこころの診療拠点病院に依頼中である。

3. パイロット的SSTの試行

・信州大学医学部附属病院において３名の発達障害とODD /CDを持つ中学生を対象に，１回１時間半，隔週で計８回，試行的にSSTを行った。

・３名の母親は各々，厳しい，怒ることが多い，冷たいなどの特徴があり，母子関係に難点があった。

・３名とも目を見て話す，姿勢を正して話を聴く，思いを言葉で伝えるなど，基本的なソーシャルスキルが身に付いていなかった。

D．考察

児童思春期の攻撃性は、行為障害を初めとするさまざまな精神障害でみられる。近年、攻撃性の治療において薬物療法が重要な役割を担っていることを示すデータが増えてきているが、薬物療法単独と比較すると心理社会的治療を併用した方が攻撃性の改善に効果的であることがいくつかの研究で示されている。薬物療法は、ペアレントトレーニング、行動変容、学校や家庭での適切な対応などにとって代わるものではない。

近年発表された治療ガイドラインによると、ADHDの併存がないCDでは最初に心理社会的治療を実施し、必要に応じて薬物療法を追加するべきであり、ADHDが併存する場合も薬物療法と並行して必ず心理社会的治療を併用するべきであるとされる。

SSTを試行して以下の2点が明らかになった。

1．ODD/CDを持つ発達障害児はソーシャルスキルと反抗的心性の両方に難がある

2．治療への動機付けは効果を左右する大きな要因である

従って，今後のSSTでは，ソーシャルスキルを高めた上で，明確な動機付けの元に，反抗的心性を取り扱う必要があると考えられた。

E．結論

ODD・CDに対する治療としては薬物療法と心理社会的治療を組み合わせて行うことが適当である。次年度は効果的なSSTとペアレントトレーニングを開発していく予定である。

F．健康危険情報

特記事項無し

G．研究発表

1．論文発表

1 原田　謙：併存障害 1．行動障害群（反抗挑戦性障害，行為障害）ほか．齊藤万比古、渡辺京太（編）、注意欠陥多動性障害の診断治療ガイドライン、pp116-120ほか，じほう社、東京．2008

2. Harada Y, Saitoh K, Iida J, Imai J, Sakai A, Sasayama D, Iwasaka H, Hirabayashi M, Hirabayashi S, Yamada S, Uchiyama T, Amano N : Establishing the cut-off point for the Oppositional Defiant Behavior Inventory. Psychiatry Clin. Neurosci. 62 : 120-122, 2008

2．学会発表

なし

H．知的財産権の出願・登録状況

1．特許取得　なし

2．実用新案登録　なし

3．その他　なし

文献

1. Kutcher S, Aman M, Brooks SJ, Buitelaar J, van Daalen E, Fegert J, Findling RL, Fisman S, Greenhill LL, Huss M, Kusumakar V, Pine D, Taylor E, Tyano S.International consensus statement on attention-deficit/hyperactivity disorder (ADHD) and disruptive behaviour disorders (DBDs): clinical implications and treatment practice suggestions.Eur Neuropsychopharmacol. 2004 Jan;14(1):11-28.
2. Ogden T, Hagen KA. Treatment effectiveness of Parent Management Training in Norway: a randomized controlled trial of children with conduct problems. J Consult Clin Psychol. 2008 Aug;76(4):607-21.
3. Dretzke J, Frew E, Davenport C, Barlow J, Stewart-Brown S, Sandercock J, Bayliss S, Raftery J, Hyde C, Taylor R. The effectiveness and cost-effectiveness of parent training/education programmes for the treatment of conduct disorder, including oppositional defiant disorder, in children. Health Technol Assess. 2005 Dec;9(50):iii, ix-x, 1-233.
4. Kaminski JW, Valle LA, Filene JH, Boyle CL. A meta-analytic review of components associated with parent training program effectiveness. J Abnorm Child Psychol. 2008 May;36(4):567-89. Epub 2008 Jan 19.
5. Schuhmann EM, Foote RC, Eyberg SM, Boggs SR, Algina J. Efficacy of parent-child interaction therapy: interim report of a randomized trial with short-term maintenance. J Clin Child Psychol. 1998 Mar;27(1):34-45.
6. Kazdin AE. Child parent and family dysfunction as predictors of outcome in cognitive-behavioral treatment of antisocial children. Behav Res Ther. 1995 Mar;33(3):271-81.
7. Webster-Stratton C, Reid J, Hammond M. Social skills and problem-solving training for children with early-onset conduct problems: who benefits? J Child Psychol Psychiatry. 2001 Oct;42(7):943-52.
8. Lochman JE, Wells KC. The coping power program for preadolescent aggressive boys and their parents: outcome effects at the 1-year follow-up. J Consult Clin Psychol. 2004 Aug;72(4):571-8.
9. Timmons-Mitchell J, Bender MB, Kishna MA, Mitchell CC. An independent effectiveness trial of multisystemic therapy with juvenile justice youth. J Clin Child Adolesc Psychol. 2006 Jun;35(2):227-36.
10. Masi G, Milone A, Manfredi A, Pari C, Paziente A, Millepiedi S.Conduct disorder in referred children and adolescents: clinical and therapeutic issues.Compr Psychiatry. 2008 Mar-Apr;49(2):146-53.
11. Pappadopulos E, Woolston S, Chait A, Perkins M, Connor DF, Jensen PS. Pharmacotherapy of aggression in children and adolescents: efficacy and effect size. J Can Acad Child Adolesc Psychiatry. 2006 Feb;15(1):27-39.
12. Malone RP, Delaney MA, Luebbert JF, Cater J, Campbell M. A double-blind placebo-controlled study of lithium in hospitalized aggressive children and adolescents with conduct disorder. Arch Gen Psychiatry. 2000 Jul;57(7):649-54.
13. Campbell M, Small AM, Green WH, Jennings SJ, Perry R, Bennett WG, Anderson L. Behavioral efficacy of haloperidol and lithium carbonate. A comparison in hospitalized aggressive children with conduct disorder. Arch Gen Psychiatry. 1984 Jul;41(7):650-6.
14. Findling RL. Atypical antipsychotic treatment of disruptive behavior disorders in

children and adolescents. J Clin Psychiatry. 2008;69 Suppl 4:9-14.

15. Klein RG, Abikoff H, Klass E, Ganeles D, Seese LM, Pollack S. Clinical efficacy of methylphenidate in conduct disorder with and without attention deficit hyperactivity disorder. Arch Gen Psychiatry. 1997 Dec;54(12):1073-80.

16. Snyder R, Turgay A, Aman M, Binder C, Fisman S, Carroll A; Risperidone Conduct Study Group. Effects of risperidone on conduct and disruptive behavior disorders in children with subaverage IQs. J Am Acad Child Adolesc Psychiatry. 2002 Sep;41(9):1026-36.

17. Reyes M, Buitelaar J, Toren P, Augustyns I, Eerdekens M. A randomized, double-blind, placebo-controlled study of risperidone maintenance treatment in children and adolescents with disruptive behavior disorders. Am J Psychiatry. 2006 Mar;163(3):402-10.

18. Pandina GJ, Aman MG, Findling RL. Risperidone in the management of disruptive behavior disorders. J Child Adolesc Psychopharmacol. 2006 Aug;16(4):379-92.

19. Aman MG, Binder C, Turgay A. Risperidone effects in the presence/absence of psychostimulant medicine in children with ADHD, other disruptive behavior disorders, and subaverage IQ. J Child Adolesc Psychopharmacol. 2004 Summer;14(2):243-54.

20. Handen BL, Hardan AY. Open-label, prospective trial of olanzapine in adolescents with subaverage intelligence and disruptive behavioral disorders. J Am Acad Child Adolesc Psychiatry. 2006 Aug;45(8):928-35.

21. Masi G, Milone A, Canepa G, Millepiedi S, Mucci M, Muratori F. Olanzapine treatment in adolescents with severe conduct disorder. Eur Psychiatry. 2006 Jan;21(1):51-7.

22. Findling RL, Reed MD, O'Riordan MA, Demeter CA, Stansbrey RJ, McNamara NK. Effectiveness, safety, and pharmacokinetics of quetiapine in aggressive children with conduct disorder. J Am Acad Child Adolesc Psychiatry. 2006 Jul;45(7):792-800.

23. Kronenberger WG, Giauque AL, Lafata DE, Bohnstedt BN, Maxey LE, Dunn DW. Quetiapine addition in methylphenidate treatment-resistant adolescents with comorbid ADHD, conduct/oppositional-defiant disorder, and aggression: a prospective, open-label study. J Child Adolesc Psychopharmacol. 2007 Jun;17(3):334-47.

厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

（主任研究者　奥山眞紀子）

分担研究報告書

人材育成・連携・受療を支援する情報基盤システムに関する研究

分担研究者　本村 陽一　独立行政法人産業技術総合研究所サービス工学研究センター

研究要旨

【目的】研究者間および外部との情報提供と交換のためサイトを立ち上げ、それを通して外部との情報や意見の交換を行い、子どもの心の診療に必要な情報システムを実現する。

【結果】以下の4点に留意した情報基盤システムの稼働を行った。

1．研究者間だけでなく、外部機関とも情報共有が可能であるインターネット（Web, http プロトコル）によるシステム化をはかる。

2．専門性や秘匿性のレベルの異なる情報を管理、提供するためにユーザ認証により、情報公開レベルや情報提供（書き込み）権限レベルの異なるユーザを管理する機構を導入する。

3．広範な参加機関による多様な実情を情報として集約するために、アンケートの依頼やアンケート回答の収集、アンケート結果の集計などを効率的に実施可能なメカニズムを導入する。

4．情報提供機構を適切に設計するために、提供すべき情報の種別、分類、専門的知識の概念などを整理し、次年度以降のシステム開発計画に反映する。

【結語】

今年度は、インターネットサーバーを立ち上げ、開発プラットフォームを構築し、関係機関に対するアンケートを収集できる Xoops, MySQL によるシステムの実装を行った。アンケートについては予備的実験を行った。情報基盤システムを利用する関連各機関の実情をヒアリングすることで、想定されるユーザー権限レベル、情報の秘匿性レベルの確認を行った。さらに、情報基盤システムにより可能になる、大規模データの収集技術と確率的知識獲得技術の適用可能性を検討した。以上の結果を踏まえ、来年度は本格的な情報の収集と知識獲得に向けての技術的提案を行う予定である。

A．研究目的

研究者間および外部との情報提供と交換のためサイトを立ち上げ、それを通して外部との情報や意見の交換を行い、子どもの心の診療に必要な情報システムを実現する。

B．研究方法

研究者間および外部との情報提供と交換のため情報基盤システムのために、Webサーバーを立ち上げ、それを通しての互いのまたは外部との情報や意見の交換を可能にするための機能を実装し、情報環境整備を行った。また、これを活用した子どもの心の診療に必要な情報提供・交換サービスの仕様検討を行い、このサイトを通じたネットアンケートの実施と回答の回収に関しては、サンプルを用意しオンラインでの動作検証により予備的実験を行った。

（倫理面への配慮）

個人情報保護や情報漏洩に関して十分考慮した設計を行った。

C．研究結果

今年度は来年度以降に本格的な情報収集実験を行うことのできる情報基盤システムを構築した。今年度は本プロジェクト固有の課題を解決するために、柔軟性と拡張性の高い Web サイト機能拡張フレームワークとして Xoops を選択し、基盤インフラの構築を行った。アンケート結果や相談事例などを大規模に収集できれば、そのデータを用いて、診療に役立つ知識を獲得することが期待できる。現在、事例を記述した自由記述テキストやアンケート結果から知識を獲得することのできる技術として、辞書と確率ネットワーク（ベイジアンネットワークを用いた情報技術がある。また日常的な子どもの行動について、観測データから計算モデルを構築する技術がある。今年度はこれまで子供の事故予防などに適用してきた当該技術に関して、本プロジェクトへの適用可能性を検討した。

D．考察

子供の心の診療に関わる専門的人材の育成のための情報基盤システムは非常に幅広いユーザ層が想定される。具体的には専門家のための情報提供であっても、その専門は発達心理、精神医学、小児医学、看護、児童心理、社会心理、教育、虐待、福祉、地域行政、などに分かれており、これら多様で幅広い各専門分野間で共通の事象を分析することを可能にするためには、適切な共通表現を確立する必要性が明らかとなった。

また、子供の医療に関する現状を把握するためには、関係各機関における実態を比較するためのアンケート実施の重要性が明らかとなった一方で、子供の心の診療において重要な秘匿性や倫理に対する配慮の必要性も高く、通常の情報システムとは一段高いレベルでのシステム設計の必要性を確認した。

E．結論

以下の 4 点に留意した情報基盤システムの稼働を行った。

1．研究者間だけでなく、外部機関とも情報共有が可能であるインターネット（Web, http プロトコル）によるシステム

をはかる。

2．専門性や秘匿性のレベルの異なる情報を管理、提供するためにユーザ認証により、情報公開レベルや情報提供（書き込み）権限レベルの異なるユーザを管理する機構を導入する。

3．広範な参加機関による多様な実情を情報として集約するために、アンケートの依頼やアンケート回答の収集、アンケート結果の集計などを効率的に実施可能なメカニズムを導入する。

4．情報提供機構を適切に設計するために、提供すべき情報の種別、分類、専門的知識の概念などを整理し、次年度以降のシステム開発計画に反映する。

来年度は研究者間および外部との情報提供と交換のためサイトを活用し、診療のための共有情報や診断の標準化のための知識などを共有することで、診療体制を支える情報システムの実証実験を行う。また利用者の主観評価、利用実績の客観評価により、情報システムの有効性を検証することも計画している。さらにMySQLへのアンケート収集・集計機能や、収集した大規模データからの知識獲得、知識共有サービスの実現を目指した技術提案を行う予定である。

F．健康危険情報

該当なし

G．研究発表

1．論文発表

本村陽一，不確実性に関わるコンピューティング，人工知能学会誌，vol. 23, no. 6, pp. 811-820, 2008

2．学会発表

・Yoichi Motomura, Probabilistic Causal Modeling for Everyday Life Risk Control, Proc. of International Workshop on Advanced Integrated Sensing Technologies for Safety and Security of Daily Life (IWAIST2008), 2008.

・本村陽一，ベイジアンネットワークと日常生活行動分析，人工知能学会基本問題研究会，2008.（口頭発表）

・本村陽一，西田佳史，日常生活行動理解のための計算論的行動分析，日本ロボット学会全国大会，2008.（口頭発表）

・白石康星，保川悠一，西田佳史，本村陽一，溝口博，日常生活行動情報収集管理システム，人工知能学会全国大会，3G3-03，2008（口頭発表）

・三浦未生，本村陽一，柴田康徳，西田佳史，山本哲也，事故サーベイランスシステムからの知識獲得－テキスト情報からの確率的因果構造のモデル化－．第22回人工知能学会全国大会，3G3-02，2008.（口頭発表）

・西田佳史，本村陽一，川上 悟郎，溝口博．時空間意味マッピングシステムを用いた日常生活行動理解．第22回人工知能学会全国大会，3G3-06，2008.（口頭発表）

・石川詔三，本村陽一，河田論志，西田佳史，原一之，日常生活行動における確率的因果構造モデルの構築と行動推論．第22回人工知能学会全国大会，3G3-04，2008.（口頭発表）

・本村陽一，西田佳史．計算論的日常生活行動理解研究の展開．第22回人工知能学会全国大会，3G3-10，2008.（口頭発表）

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

研究成果の刊行に関する一覧表

書　籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	ページ	出版年
奥山眞紀子	子ども虐待の発見と対応－医療現場から,	高橋重宏	子ども虐待新版	有斐閣	東京	159-175	2008
奥山眞紀子	精神科救急 身体的虐待		小児科臨床ピクシス　小児救急医療	中山書店	東京	140-042	2008
奥山眞紀子	精神科救急 ネグレクト		小児科臨床ピクシス　小児救急医療	中山書店	東京	143-145	2008
奥山眞紀子	A.被虐待児の治療方法と治療構造	齊藤万比古 本間博彰 小野善郎	子どもの心の診療シリーズ５子ども虐待と関連する精神障害	中山書店	東京	179-198	2008
奥山眞紀子	アタッチメントとトラウマ	庄司順一 奥山眞紀子 久保田まり	アタッチメント 子ども虐待・トラウマ・対象喪失・社会的養護をめぐって	明石書店	東京	143-176	2008
奥山眞紀子	アタッチメント対象の喪失	庄司順一 奥山眞紀子 久保田まり	アタッチメント 子ども虐待・トラウマ・対象喪失・社会的養護をめぐって	明石書店	東京	177-193	2008
Barr, RG, Fujiwara, T.	Crying in Infants: Fussiness to Colic.	Rudolph, CD, Rudolph, AM, Hostetter, MK, Lister, GE, Siegel, NJ,	Rudolph's Pediatrics, 22nd Edition	McGraw-Hill	New York	in press	

Desapriya, E., Scime, G., Cripton, P., Babul, S., Fujiwara, T., Subzwari, S., Pike, I.	Misuse of child restraint seats: What can be done to reduce misuse of this life saving safety device?	Columbus, F.	Consumer Product Safety	Nova publishers	New York	in press	
柳川敏彦	子ども虐待 ―シグナルを誰かに受け止めてほしい	乾　美紀 中村安秀	子どもに優しい学校	ミネルヴァ書房	京都	17-37	2009
柳川敏彦	虐待の徴候	市川光太郎	プライマリ・ケア救急　小児編	プリメド社	大阪	101-107	2008
山崎嘉久	こども虐待を疑うとき？	末廣　豊 宮地良樹	小児の皮膚トラブル　ＦＡＱ	診断と治療社	東京	289-291	2008
山崎嘉久	院内学級　病院には先生を待っている子どもたちがいる	乾　美紀 中村安秀	子どもにやさしい学校	ミネルヴァ書房	京都	133-159	2009
市川光太郎	皮膚で見つける児童虐待	宮地良樹	WHAT'S NEW IN 皮膚科学 2008-2009	メディカルレビュー社	東京	146-148	2008
市川光太郎	小児救急現場から見た児童虐待の実態と課題	小林　登	子どもの虹情報研修センター紀要 6号	日本虐待・思春期問題情報研修センター	横浜	1-17	2008
市川宏伸	注意欠陥多動性障害　臨床的側面　―いくつかの課題について―	松下正明 加藤　敏 神庭重信	精神医学対話	弘文堂	東京	957　―　970	2008
市川宏伸	診断・対応のためのＡＤＨＤ評価スケール ＡＤＨＤ－ＤＳ（ＤＳＭ準	市川宏伸、田中康雄		明石書店	東京		2008

	拠) チェックリスト、標準値とその臨床的解釈						
市川宏伸 大倉勇史	**児童思春期事例**	五十嵐禎人	専門医のための精神科臨床リュミエール1	中山書店	東京	173 － 183	2008
市川宏伸	二次障害と薬物治療		ＬＤ ＆ ＡＤＨＤ Ｎｏ．26	明治図書	東京	12-15	2008
市川宏伸	事例に学ぶ適切な支援法		ＡＤＨＤのある子どもの学校生活（全国養護教諭サークル協議会企画）	農文教	東京	194-217	2008
市川宏伸	注意欠如・多動性障害		子どもの心の診療シリーズ２　発達障害とその周辺の問題	中山書店	東京	77-88	2008
市川宏伸	児童青年期を中心に　－ライフサイクルと社会精神医学－		社会精神医学（日本社会精神医学会編）	医学書院	東京	150-159	2008
田中康雄	ADHDと破壊的行動障害	小野善郎 本間博彰	子どもの攻撃性と破壊的行動障害	中山書店	東京	印刷中	2009
田中康雄	学校・地域社会と心の健康	齊藤万比古	子どもの心の診療入門	中山書店	東京	印刷中	2009
北山真次	災害・事故などのトラウマ体験	奥山眞紀子	ケーススタディこどものこころ	日本医事新報社	東京	21-24	2008
齊藤万比古	関係性における暴力―その理解と回復への手立て―	藤岡淳子	いじめ	岩崎学術出版	東京	46-61	2008
齊藤万比古	不登校児を理解する	中根 晃 牛島定信 村瀬嘉代子	詳解子どもと思春期の精神医学	金剛出版	東京	144-153	2008
齊藤万比古	児童・思春期	上島国利 樋口輝彦 野村総一郎	気分障害	医学書院	東京	574-583	2008

		他					
齊藤万比古 渡部京太編			第３版 注意欠如・多動性障害—ADHD—の診断・治療ガイドライン	じほう社	東京		2008
宮本信也	□．１．知的障害（精神遅滞）	宮本信也 田中康雄	子どもの心の診療シリーズ２：発達障害とその周辺の問題	中山書店	東京	46-58	2008
宮本信也	□．１．発達障害への対応の概要	宮本信也 田中康雄	子どもの心の診療シリーズ２：発達障害とその周辺の問題	中山書店	東京	198-206	2008
宮本信也	自律神経症状の発現機制	中根晃 牛島定信 村瀬嘉代子	子どもと思春期の精神医学	金剛出版	東京	365-375	2008
庄司順一	乳幼児期の食行動の問題	奥山真紀子	ケーススタディこどものこころ	日本医事新報社	東京	5－8	2008
庄司順一	アタッチメント研究前史	庄司順一 奥山真紀子 久保田まり	アタッチメント	明石書店	東京	11－41	2008
庄司順一	わが国における社会的養護とアタッチメント理論	庄司順一 奥山真紀子 久保田まり	アタッチメント	明石書店	東京	92－121	2008
庄司順一			保育の周辺	明石書店	東京		2008
杉山登志郎 服部麻子	子ども虐待	森 則夫 中村和彦編	子どもの精神医学	金芳堂	東京	212-230	2008
杉山登志郎	発達障害の診断	宮本信也田中康雄 齊藤万比古編	発達障害とその周辺の問題	中山書店	東京	144-154	2008
浦野葉子 杉山登志郎	破壊的行動障害	本間博彰小野善郎 齊藤万比古編	子ども虐待と関連する精神障害	中山書店	東京	138-154	2008
杉山登志郎	発達段階からみた児童精神疾患	牛島 定信村瀬 嘉代子中根 晃編	子どもと思春期の精神医学	金剛出版	東京	624-630	2008
亀岡智美	長期的ケア	斉藤万比古 本間博彰	子どもの心の診療シリーズ５	中山書店	東京	219-233	2008

		小野善郎	子ども虐待と関連する精神障害				
田中英高	子どもの起立性調節障害と不登校	大阪教育大学教職教育研究開発センター教育臨床部門	平成19年度教育臨床研究セミナー報告書		大阪	31-64	2008
田中英高	小児の摂食障害	山口徹 北原光夫 福井次矢	今日の治療指針2008年版	医学書院	東京	1053-1054	2008
田中英高	心身症	大関武彦 内山聖	小児科学	医学書院	東京	1728-1733	2008
田中英高	たちくらみ・めまい・頭痛 ―起立性調節障害	奥山眞紀子	ケーススタディこどものこころ	日本医事新報社	東京	74-77	2008
田中英高	小児心身症の対策に関する研究：起立直後性低血圧（INOH）早期発見のためのチェックリスト作成に関する研究		大阪難病研究財団平成16-18年度研究報告集		大阪		2008
齊藤卓弥	薬物療法	齊藤万比古	子どもの精神病障害	中山書店	東京	210-224	2009
青木　豊	乳幼児期の精神障害と統合失調症	松本英夫 飯田順三	子どもの心の診療シリーズ8　子どもの精神病性障害―統合失調症と双極性障害を中心に	中山書店	東京		印刷中
青木　豊	アタッチメント障害の診断と治療	庄司順一 奥山眞紀子 久保田まり	アタッチメント	明石書店	東京	122-142	2008
青木　豊	愛着障害	齊藤万比古 本間博彰 小野善郎	子どもの心の診療シリーズ5　子ども虐待と関連する精神障害	中山書店	東京	97-115	2008
青木　豊	愛着障がい	奥山眞紀子	ケーススタデイこどものこころ	日本医事新報社	東京	13-16	2008
青木　豊	子供の発達と心理教育・支援の現状と理想	松本真理子	『現代のエスプリ』子そだてを支える心理教育とは何か	至文堂	東京	15－44	2008
青木　豊	乳幼児期の母	松本真理子	『現代のエスプ	至文堂	東京	45-53	2008

	子関係の心理と支援		リ』子そだてを支える心理教育とは何か				
青木　豊	小児期の反応性愛着障害	厚生労働省雇用均等・児童家庭局	『一般精神科医のための子どものこころの診療テキスト』	精神神経学雑誌	東京		2008
原田　謙	併存障害　1．行動障害群（反抗挑戦性障害，行為障害）ほか	齊藤万比古 渡辺京太	注意欠陥多動性障害の診断治療ガイドライン	じほう社	東京	116-120 ほか	2008
Harada Y, Saitoh K, Iida J, Imai J, Sakai A, Sasayama D Iwasaka H, Hirabayashi M, Hirabayashi S Yamada S, Uchiyama T, Amano N	Establishing the cut-off point for the Oppositional Defiant Behavior Inventory.		Psychiatry Clin. Neurosci.	Blackwell		120-122	2008

雑　誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻名	ページ	出版年
奥山眞紀子	虐待を疑った場合の家族への対応	小児科診療	71(5)	835-839	2008
奥山眞紀子	虐待が疑われる子どもに対するケア	小児看護	31(13)	1756-1760	2008
奥山眞紀子	児童虐待	児童・青年期の精神障害治療ガイドライン　精神科治療学	23 (増刊号)	276-280	2008
奥山眞紀子	子どものこころの診療体制の整備—国での取り組み	小児科診療	71(11)	1907-1908	2008
Fujiwara, T.	Is Altruistic Behavior Associated with Major Depression Onset?	PLoS One	4(2)	e5557	2009
Barr, R.G., Barr, M., Fujiwara, T., Conway, J., Catherine, N., Brant, R.	Do educational materials change knowledge and behaviors regarding crying and shaken baby syndrome in mothers of newborns when delivered by public health home visitor nurses? A randomized controlled trial	Canadian Medical Association Journal (CMAJ)	in press		2009
Fujiwara, T. Chan, MH	The role of Behavioral Outreach Worker in increasing mental health service utilization for children.	Pediatrics International	in press		2009
Fujiwara, T., Okuyama, M., Tsui, H., Koenen, KC	Perinatal factors associated with infant maltreatment	Clinical Medicine: Pediatrics	1	29-36	2008
Fujiwara, T.	Violence and Asthma: A Review	Environmental Health Insights	2	45-54	2008
Fujiwara, T., Lee, C.	Association of parental psychiatric morbidity with their altruistic behaviors and sense of obligation to children in the United	Clinical Medicine: Psychiatry	1	25-35	2008

	States				
Fujiwara, T., Okuyama, M., Miyasaka, M.	Characteristics that distinguish abusive from non-abusive head trauma among young children who underwent head computed tomography in Japan.	Pediatrics	122	e841-e847	2008
藤原武男	親子保健・学校保健（3）「胎児期・幼少期の親という環境が子の遺伝子発現を変える：ライフコースアプローチとエピジェネティクス」	日本公衆衛生雑誌	55(5)	344-349	2008
Desapriya, E., Subzwari, S., Fujiwara, T., Pike, I.	Conventional vision screening tests and older driver motor vehicle crash prevention	International Journal of Injury Control and Safety Promotion	15(2)	124-126	2008
Fujiwara, T., Kawachi, I.	Social Capital and Health: A Study of Adult Twins in the United States.	American Journal of Preventive Medicine	35(2)	139-144	2008
Desapriya, E., Fujiwara, T., Scime, G., Babul, S., Pike, I.	Compulsory child restraint seat law and motor vehicle child occupant death in Japan 1994-2005	International Journal of Injury Control and Safety Promotion	15(2)	93-97	2008
藤原武男 奥山眞紀子 松本務 有瀧健太郎 余谷暢之 宮坂実木子 仁科幸子	2歳未満児の虐待による頭部外傷の診断基準の提案	日本小児科学会雑誌	112(4)	704-712	2008
Fujiwara, T., Kawachi, I	A prospective study of individual-level social capital and major depression in the United States.	Journal of Epidemiology and Community Health	62(7)	627-633	2008
Fujiwara, T., Okuyama, M,	Characteristics of hospital-based	Child Abuse & Neglect.	32	503-509	2008

Kasahara, M, Nakamura, A.	Munchausen Syndrome by Proxy in Japan.				
Fujiwara, T., Okuyama, M, Kasahara, M, Nakamura, A.	Differences of Munchausen Syndrome by Proxy by predominant symptoms in Japan.	Pediatrics International.	50	537-540	2008
Fujiwara, T., Lee, CK.	The impact of altruistic behaviors for children and grandchildren on major depression among parents and grandparents in the United States: A prospective study.	Journal of Affective Disorders	107	29-36	2008
柳川敏彦	保健機関と医療機関との連携の実態と課題 —実践—	小児保健研究	67(2)	274-277	2008
柳川敏彦ら	児童虐待防止ネットワーク設立の影響	和歌山県立医科大学保健看護学部紀要	4	31-41	2008
柳川敏彦ら	児童虐待防止ネットワーク構築と評価への支援—3 年間の取り組みより—	和歌山県立医科大学保健看護学部紀要	4	61-68	2008
南　弘一, 柳川敏彦ら	和歌山県立医科大学小児成育医療支援室	和歌山医学	59(3)	106-108	2008
秋津佐智恵 山崎嘉久 加藤直実	小児科医の子育て支援や虐待対応に関する意識と取り組み	子どもの虐待とネグレクト	10(1)	45-53	2008
山崎嘉久	子どもの禁煙指導	臨床スポーツ医学	26(2)	218-224	2008
山崎嘉久	脳神経外科医の子ども虐待への対応 —社会的責務と日常診療の中での役割—	脳神経外科ジャーナル	in press		2009
市川光太郎	外傷（小児虐待の場合も含めて）	救急医療ジャーナル	90(16)	28-33	2008
市川光太郎	小児救急 Q&A「児童虐待」	救急・集中治療	20	1643-54	2008
市川光太郎	質疑応答：児童虐待の早期発見と対応	日本医事新報	4418（12 月 27 日号）	89－91	2008
山田不二子 田中真一郎 他	乳幼児揺さぶられ症候群 (Shaken Baby Syndrome) 予防プログラムの試験的実施	子どもの虐待とネグレクト	10(1)（通巻 22 号）	17-24	2008
山田不二子	乳幼児揺さぶられ症候群	子どもの虐待と	10(1)	118-123	2008

田中真一郎他	(Shaken Baby Syndrome)予防プログラムの一例	ネグレクト	(通巻22号)		
山田不二子	第一次医療としての児童虐待への対応(上)	月刊保団連	988	49-52	2009
山田不二子	第一次医療としての児童虐待への対応(下)	月刊保団連	989	印刷中	2009
市川宏伸	広汎性発達障害日本自閉症協会評定尺度（ＰＡＲＳ）短縮版の信頼性妥当性についての検討	精神医学	50	431-438	2008
石塚一枝 市川宏伸	発達障害	小児科	49	1093-1101	2008
鈴村俊介 市川宏伸	青年期女子外来患者における自傷行為	臨床精神医学	37	1473-1478	2008
菊地祐子 市川宏伸	児童精神科における入院治療	精神科治療学	23(増刊号)	45-49	2008
中山淑子 市川宏伸	アスペルガー症候群の診断と治療教育	小児科臨床	61(12)	2420-2425	2008
田中康雄	我が子を犯罪者にしない子育て	財界さっぽろ	8月号	188-189	2008
田中康雄	発達障害と虐待、そして加害行為について	法と心理	7(1)	23-35	2008
田中康雄	子どもと家族を支える「ノットワーキング」づくり	保健師ジャーナル	64(10)	882-887	2008
田中康雄	AD/HD の二次的障害への対応	小児科臨床	61(12)	177-182	2008
田中康雄	児童精神科臨床と成人期臨床を繋ぐために	臨床精神医学	37(12)	1581-1586	2008
齊藤万比古	AD/HD の治療における薬物療法の位置づけ	臨床精神薬理学	11(4)	587-596	2008
齊藤万比古	講座発達障害が引き起こす二次障害へのケアとサポート　①二次障害とは何か	月刊実践障害時教育4月号	通巻418号	40-45	2008
齊藤万比古	講座発達障害が引き起こす二次障害へのケアとサポート　②学童期における二次障害へのケア	月刊実践障害時教育5月号	通巻419号	40-45	2008
齊藤万比古	講座発達障害が引き起こす二次障害へのケアとサポー	月刊実践障害時教育6月号	通巻420号	40-45	2008

	ト　③思春期青年期における二次障害へのケア				
齊藤万比古	不登校はなぜ減らないのか	教育と医学	56(4)	308-316	2008
齊藤万比古	専門医のための特別講座 児童思春期精神障害(摂食障害を含む)の疾病概念と病態―発達危機という文脈での理解―	精神神経学雑誌	110(4)	327-337	2008
齊藤万比古	行為障害概念の歴史的展望と精神療法	精神療法	34(3)	265-274	2008
齊藤万比古,平 理英子	高機能広汎性発達障害	治療	90(8)	2311-2314	2008
齊藤万比古 岩垂喜貴	児童・思春期の精神障害治療における臨床検査	精神科治療学	23(1)	81-88	2008
宮本信也	乳幼児健診システムにおける発達障害児のスクリーニング	小児科臨床	61	2630-2637	2008
宮本信也	子ども虐待の理解	発達障害研究	30	64-76	2008
宮本信也	発達障害と子ども虐待	発達障害研究	30	77-81	2008
宮本信也	小児の痛み　49.心理学的療法	小児科	49	1740-1746	2008
宮本信也	発達障害の概要	治療	90	2259-2264	2008
宮本信也	子どもの心の診療医をいかに養成するか：小児科における取り組み	精神神経学雑誌	110	302-306	2008
庄司順一	子どもに対する母親の結びつき	子どもの虐待とネグレクト	10(3)	315－321	2008
庄司順一	虐待対策としての乳幼児健診（2）心理臨床の視点から	母子保健情報	58	97－100	2008
庄司順一	児童虐待の現状とその防止等のための課題	犯罪と飛行	156	144－166	2008
庄司順一	地域で子どもを支援するファミリーサポートセンター	こども未来	2009 年 3 月号	10－12	2009
杉山登志郎	こども虐待への EMDR による治療２ - 親への治療 -	こころのりんしょう	27(2)	289-292	2008
杉山登志郎	成人期のアスペルガー症候群	精神医学	50(7)	653-659	2008
杉山登志郎	こどもの現在とこれから	そだちの科学	10	2-8	2008
杉山登志郎	広汎性発達障害とトラウマ	そだちの科学	11	21-26	2008

杉山登志郎	子どものトラウマと発達障害	日本発達障害学会	30(2)	111-120	2008
杉山登志郎	高機能広汎性発達障害の歴史と展望	小児の精神と神経	48(4)	27-336	2008
杉山登志郎	アスペルガー症候群の周辺	児童青年精神医学とその近接領域	49(3)	243-259	2008
Tsuchiya K. Matsumoto K. Miyachi T. Tsuji M. Nakamura K. Takagi S. Kawai M. Yagi A. Iwaki K. Suda S. Sugihara G. Iwata Y. Matsuzaki H. Sekine Y. Suzuki K. Sugiyama T. Mori N. Takei N.	Paternal age at birth and high-functioning autistic-spectrum disorder in offspring	The British Journal of Psychiatry	193	316-321	2008
Iwata Y. Tsuchiya KJ. Mikawa K. Takai Y. Suda S. Sekine Y. Suzuki K. Kawai M. Sugihara G. Matsuzaki K. Sugiyama T. Takei N. Mori N.	Serum levels of P-selection in men with high-functioning autism	Br J Psychiatry The British Journal of Psychiatry	193(4)	338-339	2008
内田志保 杉山登志郎	司法児童・青年精神医学 発達障害と非行	最新精神医学	13(2)	141-149	2008